

綾あやの鼓つづみ

いすばにやの土

中里恒子

綾あやの鼓つづみ いすばにやの土

昭和六十年二月一日 第一刷

昭和六十年三月二十五日 第三刷

定 價 一千五百圓

著 者 中里恒子

發行者 西永達夫

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三―二三 郵便番號一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

本文印刷 共同印刷 附物印刷 大日本印刷

製本 加藤製本 製函 加藤製函

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

綾あや
の
鼓つづみ

い
す
ば
に
や
の
土

題字 著者
函裝畫 スペイン舊家の紋章（著者藏）
装幀 竹内和重

會場の壁近くにある長椅子に、瘦身の半白の男が腰かけてゐた。

泰然としてゐる。挨拶に來る人にも、長椅子から立ちもしない。戦後も落ついてきて、餘裕も出はじめたのを機に、生き残つた仲間の加納夫妻の祝宴が開かれてゐるのである。従つて、客は、いづれも若くはない。人數もごたごたするほど、多くなく、内輪な雰囲気であつた。

餘興に、落語家が出て、「おみき徳利」の噺をした。めでたい内容なのである。發起人の中に、老練なこの落語家を最員にしてゐる者がゐて、今夜の招客たちの好みをいれて、招んだのであらう。

落語が終ると、座の人人が自由に歩きまはつて、舊知の話しあひになつた。

加納夫妻は、そのなかを挨拶してまはつた。やがて、長椅子の前に來て、握手しあつた。顔をみあはせてゐる。

「お揃ひで三十年、めでたいね、」

「いやありがたう……君も、」

一同は乾杯した。大河原は言ふ。

「わたしたちは、出發もおそかつた、しかし數へてみれば、はじめから、かれこれ三十年にはな
るでせうが、わたしは何十年などとは思はないよ、八十年……もつとでもいい、長長と一緒に生
きたかつたから、まあさういふことで、自分たちの年月は考へずにゐたが、あれが先に逝つたの
は、のちの世で暮す仕度のためだと思つてゐるよ、」

「さうか、羨しい次第だな、」

「生きてゐるうちが花だが、わたしの花は、まだ枯れてはゐない、わたしは短い幸福だけで、生
涯、年月などしらずにゐられさうだ、」

「外國暮しでは、君はあちこちと長いなあ、」

加納の言葉に、大河原は言つた。

「……家内の骨をもつて來た、わたしたちの墓は、向ふにもあるよ、」

「ひとりで不自由だらうに、」

「いや、この足の治療をする爲もあるがね、住み馴れてゐるから暮しいいのさ、」

「おみき徳利の落語は、占ひが主になつてゐるが、スペインは、占ひの盛んな國だらう、」

「さうだな、占星術水晶占ひ、手相人相、ジプシイ獨特の占ひとか、アラブ式の占ひとか、いろ
いろありましたよ、」

「大河原君は、占ひを信じるのかい、」

「ああ信じたよ、いいことはね、わるいことは信じないといふらくな氣であると、結構當つた、わたしは、あれと一緒に暮すやうになつて、幸福を信じた時から、占ひも信じた、一種の自己暗示でもあつた、」

人人は、暫く大河原の周りにゐたが、まもなく、お開きになつた。ボーイが車椅子を運んで來た。

大河原は、友人たちの前で、杖を突いて立ち上り、につこりした。立つた姿勢は、すらりとした長身である。大河原は、車椅子にかけると、そのままエレヴェーターホールに向つたのである。車椅子に乗るとき、加納が、手を貸した。

「家の中は歩ける、あれが、わたしの片足をあの世へ持つていつてしまった、ひとりで出歩かせないためだらう、焼もちやきだつたから、」

「なんとでも言やあがれ……」

「しやあしやあと言へるほど、幸福だつたのだな、」

「誰も、實體は見えてゐないよ、」

「……」

「いや、彼は、スペインで生涯の殆どを送つて、實際にしあはせだつたらう、日本で、あの戀はとげられなかつたらうから、」

加納の言葉にちよつと、しいんとなつた。

「さうだ、僕の妹は、多少は大河原君ともつきあひがあつた……僕より、大河原については、くはしいかもしれない、」

さう言はれて、座に残つた何人かが、改めて、加納の妹と言はれる人物に、視線を集めた。

はなれた椅子にかけてゐた、灰色の束髪にオリヅ色の眼鏡をかけて、ぽかんとした表情で、細い紙巻煙草をもつてゐた女性が、つかつかと、加納のそばに來たのである。

「……なにおつしやるの、わたくしだつて、大河原さんのことは、くはしくないわ、」

「君は、スペインにも長く滞在してゐたから、その間のことは、僕たちよりわかつてゐる筈だらう、」

「どうして、さう他人の身邊を噂したいのでせうね、大河原さんのおつしやつた通り、おしあはせだつたわ、他處眼にも、でも幸福であることは不思議でも、なんでもありませんわ、あのおふたりは、前世からの戀びとだつたのでせうね、」

「なんだ、占ひじみてゐる、」

「占ひ？ さういふ觀方ではありませんか、たしかに、大河原さんは、日本の風俗習慣から言へば、若氣の至りで濟むことを、一生、もちつづけた人ですから、……わたくしなど、羨望して、邪魔してやらうとしたくらゐでした、」

「君のことはいいよ、ぢや、大河原は、おききの通り、自分でも、しやあしやあと言つた通り、われらには出來ない、むづかしい戀をしとげた男として、乾杯して……」

やうやく、ほんたうのお開きとなつたのは、大河原が立ち去つてから、二十分ものちのことであつた。

加納夫妻と、妹の阿佐とは、車の来るまで出口でも暫く話してゐた。

「けふ大河原さんが、御出席になるとは知らなかつたわ、」

「いや、僕も……車椅子ではひつて来て、あの席へ着いたとき、ああ来てくれた、と嬉しかつたのだ、」

「案外、お元氣で、三十年、四十年もおくさんと無事に暮してゐた人たちより、男つばいし、色氣があたりでした、……あらごめんなさい、」

「足がまるつてる、」

「足ぐらい何よ、氣持がまるつてるひとより、ずつと生き生きしてましたよ、」

「なんだ、君は、大河原のそばに來なかつたね、」

「……ああいふ席で、ろくなお話はできませんもの、あとでと思つたから……」

「そんな、とつときの件があるのか、」

「すくなくとも、當りさはりのある話の出来る相手ですもの、」

それから、別別の車に乗つた。

「いづれお電話で、大河原さんのお住居を伺ひます、」

加納夫妻は、阿佐の言ひ残したことについて、首をかしげた。

「僕も知らんね、突然、大河原はやつて來たのだから、誰か、友人からでもきいて、きてくれた

のだらうな、」

大河原玄一郎は、二人きりの兄妹で、両親から大事に育てられた。父親は、先代からの貿易の家業を繼がせるつもりで、玄一郎を、商業學校に入れた。店は、新橋の土橋の近くにあつて、住居は、赤坂の表町にあり、目立たぬ商賣だが、堅實な取引で知られてゐる。その頃の仕入れの主なもの、象牙、鼈甲、印石などで、派手な商ひではないが、金嵩の張る品物を扱ふ、特殊な店であつたのである。

象牙細工の職人で、健さんと呼ばれて、よく出入りをしてゐた男が、玄一郎とは、年も違ふのに、いい遊び相手であつた。健さんは、玄ちやんとか、一ちやんとか、まるで二人の人物のやうに、呼ぶ癖があつて、玄一郎も、いつかそれに慣れてゐた。

「玄ちやん、象牙細工は、長崎が本場だと言ふがね、江戸から明治に變る頃は、いい職人が、かなり流れこんで、本場より繁昌したんだよ、」

「うん、」

「象牙で觀音さまなど彫つてさ、金持の客の注文が多かつたね、」

「健さんは、まだ仕事が出来なかつたんだらう、」

「おやちと、店の番頭がやつてゐたのは、見てゐた、白い粉が、前掛に降りつもるほど、削るんだ、その粉粉のも、捨てないで、前掛を拂ふとき、箱の中に溜めてゐたね、それほど、高價だつたんだ、」

「……………」

「お屋敷からの注文で、櫛と簪を彫つてゐたことがある。その年の干支で、兔が玉を抱いてゐる玉兔の繪柄が、櫛の飾りになつてゐた、簪は、矢羽根のやうで、先が、耳かきになつてゐた、」

「よく覚えてるね、」

健さんは、「覚えてた、」と言つた。

「どんなひとが、この櫛かざりをするのかといふ興味もあつたんだ、」

玄一郎は、

「どんなひとだつた？」

「いや、お屋敷へは、店から届けにゆくものだから、注文主と會ふことはなかつたのだけれど……」
玄一郎は、なんだつまらないと思つて、その場を立つてしまつた。健さんと、あまり親しくすることは、両親が禁じるといふのではないが、いい顔をしないことを知つてゐたからである。

しかし母親は、健さんが來ると、世間話をした。景氣が いい の、わるいの、仕事はあるか、賣れるか、といふやうなことで、母親には、結構、店の取引状態がわかるやうである。

父親は、店の話は、うちではしなかつた。時時、玄一郎には、

「どうだい、うちの商賣は特殊だから、派手ではないが、取引先が安定してゐるつよ味がある、お前の時代には、取引の幅を、もつとひろげて、おもしろいことが出来るやうになると思ふのだ、」
と言ふ。

「……そんなことわからないよ、職人がゐなくなれば、象牙だけあつても、仕方ないでせう、」

「職人といふものは、さう簡単に、自分の腕を見捨てないものだ、それには、手間賃、工賃を安くしてはいけない、腕を買つて、仕事をさせて、うちは利益を得るのだから、」

その程度の商法の理論は、玄一郎にも理解出来る。もつと突きつめてゆくと、現地へ出かけて、自由に、話しあへる言葉が必要に思へるのであつた。

「……だからさ、外國語をひろく覺える必要があるでせう、」

「いや、それには、それ専門の人間があるのだから、」

「……」

玄一郎は、そのとき、外國語を日本語同様に、読み、書き、話せる世界の人間になりたいと思つた。商賣のためだけではない。象の歩いてゐる國、寶石の出る山、黄いろい河、繪畫で見る、ピンク色の豐滿な女の肉體への憧憬も、いつしよに彼の心を揺り動かしてゐた。つまり境界のない人間である。

健さんが、暫く顔をみせない。

そんな噂をしてゐるとき、母親が言ひ出した。

「うちの隣の家をこはしはじめたのですよ、何か、建つのでせうか、」

「さうらしいね、早く買つておけばよかつた、なにしろ、跡つぎの子供がゐなくて、夫婦とも亡くなつてゐる家で、ちよつと、考へものだが、」

「どんな人が、買はれたのでせう、」

「健さんが、言つてゐたな、なんでも、外國の銀行にゐた人で、息子夫婦が住むらしいとか、あ

「それは、早耳の男だから、」

それつきり、隣の買ひ手の話はしなくなつたが、まもなく、茶室だけ残して、全部とりこはされて、變つた二階屋が建ちはじめた。

玄一郎は、窓が、引戸でなく、みんな兩開きのがらり戸がつき、階下の縁側の幅が廣く出張つて、その場所には屋根がなく、日光が直接さんさんと照つてゐるのを、まるで西洋館の露臺のやうだと、眺めてゐた。

學校の夏休みが終つた九月には、外觀のペンキがうす茶色に塗られて、黒い日本瓦とも調和のよい家が出來上つた。垣根は低く、家と同じ色彩の門扉が、石の門にとりつけられた。母親までが、もの珍しげに、

「變つた家が建ちましたね、ペンキ塗と言つても、落ちついていいこと、」

門の前に立つて眺めたりする。

玄一郎も、新しい家に好奇心をもつた。自分の家をはじめ、このあたりの住宅は、植木が多く、塀も高く、小暗いなかに、家が埋つてゐるやうな古さなのである。

新しい家だけが、朝から、かんかと陽が當つてゐる。

「暑さうね、」と母親が、秋のつよい日差しを見上げてゐるとき、何やら職人が來て、窓といふ窓に、花模様の窓掛を吊るしてしまつた。歸つてきた玄一郎も、不思議さうに眺めて、美しい光景を見つめてゐたのである。

翌日、隣家は引越荷物を運んで來た。立派な家具調度である。母親が、店から戻つた主人に、

聲をかけた。

「お隣が越して來られました、大層、立派なお道具ですよ、」

「なんだそのやうな、物見だかいことを言ふでない、」

「でもお隣さんですもの、」

玄一郎は、部屋窓から、隣家の様子を眺めてゐた。明るい窓掛がひらひらして、その間に、細い女の姿が見えた。横顔がちらりと覗いただけなのに、玄一郎は、ぶるつと震へた。なんとも言ひ表はせないその身のこなしに、眼をこらしたが、すぐ、窓掛の陰になつてしまった。女といふものを、はじめて見る氣がした。

もう一度見たい、そんな上氣した氣持で、玄一郎は、窓ぎはを離れないのである。

「玄ちゃん、お茶ですよ、」

玄一郎は答へない。背後に、妹が立つてゐた。

「なにしてるの、お父さんもお歸りよ、」

「……………」

「他處のお宅など覗いたりして、」

「覗いてなんかゐないよ、お茶はいらない、べつに飲みたくないから、」

さう言つたが、玄一郎の咽喉は、からからに乾いてゐたのである。

それから三十分もしないうちに、隣家から、挨拶にみえた。その頃の町家のしきたりでは、轉居の近づきに、そばの切手を持つて來るのである。だいたいの定りは、近くのそば屋のそば十枚

といふのが普通であつたが、隣家では、永坂のそば切手が十五枚とあつて、のし紙の表に、高田としてある。

母親が、挨拶にみえたと、家族に話した。

「おくさんと、女中さんとで見えました、そのおくさんの御人柄のよいこと、ちよつと眼を見はるやうなおひとでした……でも心安くは出来ないやうな、品のよい、すました方で、」

玄一郎は、黙つてゐた。

「永坂の切手なのです。氣取つたことをするお家ですね、」

關東の震災から五年ほどたつたその當時、麻布永坂の御前そばといふのは、上等とされてゐて、座敷へ上つて食べたものである。つまり駆けこんで、腰かけで食べる客よりも、わざわざ遠い町内から、食べに來る客の多い、そば屋と言つても、上等な海老の天ぷらなどを出し、そばで御酒を飲むやうな落着いた店構へなのである。

大河原の家でも、時折いつた、それは御馳走氣分の時であつた。隣家のそば切手を、氣が利いてゐると思つたのは、日頃のゆきつけの店だつたためである。

玄一郎は、母親が、隣家のおくさんを、珍しいやうな人柄と言つたことだけが、頭に殘つてゐた。

雨上りの日であつた。歸宅途中の玄一郎の前を、人力車がゆく。車は、隣家の門の前で降り、下りた婦人が、くぐり戸からはひつた。玄一郎は、早足に門の前に近づき、中を覗いた。包みをもつた婦人が、車夫に笑顔で聲をかけてゐる。ちらつと、玄一郎の眼とあつたが、しなやかな姿

で、玄關に消えてしまった。玄一郎は、急ぎその場を離れて、すぐ家には歸らずに、住宅街をひとまはりし出したのである。

「お兄ちゃん、どこへ行くの、」

妹が、學友と連れ立つてゐた。

「ちよつと散歩だ、」

言ひ捨ててゆく後から、ばつたり出會つた少女達の嬌聲がきこえたが、玄一郎には、なんの感じもない。隣家の婦人を、ちらつと見たときの、眼に沁み入つたまぶしさほどの、氣にとまるな

にひとつもなかつた。

食後に、妹が、玄一郎の部屋に來た。

「お友達のお嬢さんね、お隣の高田さんとは親戚なのですつて……御主人とは従妹ですつて、」

「珍しくもない、従妹だつて、」

「さう、あのおくさんを貰ふとき、大騒動だつたさうよ、どうしてかわかる？」

玄一郎は、どきんとなつて、わからないよ、他人の家のことなんか、と言つた。妹は、小聲になつて、

「血筋がわるいつて、どういふこと？」

「血筋？　なんだらう、」

「結婚のとき、兩方で、血統の證明書みたいなもの、交換するつて、本當？」